

市民俳歌柳壇

特選

ふらふらここを立ち漕ぐ子らの長き足

石井町 吉澤 伸人

●特選の選評 ふらふら(ふらん)が季語で鞆(たもと)とも言つ。冬から解放された子どもたちが全身でぶらんこを漕ぐ(立ち漕ぐとは甚だ心配だが)。両脚を力いっぱい天に向けて突き上げる。その両脚のすらりと長いこと。現代児の躍動感溢れた姿が一句から伝わってくる。

俳句



加茂都紀女先生

入選

新茶酌む母の残せし万古焼

西川田南1丁目 星野 志郎

シヤキシヤキと根っこが主役野生芹

緑2丁目 片嶋 青水

見納めはこの余花と決め二十年

野沢町 渡辺 明広

風の午後空へあくびの鯉幟

五代2丁目 斎藤 武夫

特選

金色の絨毯のごと麦畑
五月の風にうねり続ける

西2丁目 佐藤 順子

●特選の選評 上の句、金色の絨毯を敷き詰めたような、光輝く麦畑の園が感じられる。初冬に時かれ、冬を越し、春に育ち、初夏に実る(麦秋とも)景が目前にある。下の句、五月の風(薰風)は、麦畑に爽やかに、軽やかに、大きなうねりを、緩やかなうねりを続ける。風のもたらす黄金色の麦畑の風景は、金色の大海原が眼裏に顕つ。

短歌



安野登美子先生

入選

花水木風来るたびに散り急ぎ
天の深みへ手紙投げあぐ

野沢町 鈴木 孝男

銀鱗の跳ねるがごとき細波を
立たせて田の面を渡る春風

清原台5丁目 北市 邦子

ひやひやと背に冷たきは花の頃
春の嵐の窓を打ちあふる

大曾5丁目 岩淵 照美子

はらはらと風に散りゆく蔓薔薇の
切なきまでの儂さに酔ふ

下田原町 五十嵐 由美子

特選

老いの脚枯木に花の貼り薬

中戸祭1丁目 阿部 壽美江

●特選の選評 弛んだ皺の多い脚を枯木に、そして貼り薬を花に例えた愉快な句である。細かい話だが、「足」は足首から下の部分を指し、「脚」は脛から下の伸びた部分、つまり、太ももの付け根の関節から下全部を指すので使い分けられていると思う。

川柳



佐藤隆久先生

入選

老境の真只中の迷い道

鶴田町 鈴木 美美子

紙風船萎んで母の顔となり

下栗町 大塚 榮子

連れだつて無理と知りつつ行くエステ

八幡台4丁目 羽場 京子

衣更え一気に夏日急がせる

鶴田町 西宮 久

俳歌柳壇の応募方法

- 1人各3句(首)以内。俳句・短歌・川柳の併記は不可。
- 対象は市内在住者で、未発表作品。年齢問わず応募できます。
- はがき表面=住所・氏名・ふりがな・応募する壇名。
- はがき裏面=作品(漢字にはふりがなも)・作品への思い。
- 毎月20日までに、〒320-8540市役所広報広聴課☎(632)2028へ。
- WEBによる応募も受け付けます。詳しくは、市☎をご覧ください。

ID 1022877



▲市☎

表

裏

3208540
住所・氏名・壇名

作品への思い
作品への思い